



占領期資料収集プロジェクト研究会（第1回）



熊田 淳美 氏（第1回）



千代 正明 氏（第1回）



枝松 栄 氏（第1回）



泉 昌一 氏（第2回）

占領期資料収集プロジェクト研究会—初期を中心に— 第1回

熊田 淳美・千代 正明・枝松 栄
政治史料課編

開催日時：2013年12月18日 15:00～17:00

場所：国立国会図書館東京本館 新館3階研修室

講師：熊田淳美（元国立国会図書館副館長）

千代正明（元国立国会図書館専門調査員）

枝松栄（元国立国会図書館専門調査員）

熊田 淳美（くまた あつみ）

1976年在外研究の欧米出張の際に、米国国立公文書館（National Archives and Records Service NARS¹⁾）の施設一つで、当時米国メリーランド州ストランドにあったワシントン・ナショナル・レコーズ・センター（Washington National Records Center）でGHQ/SCAP資料収集のために事前調査をし、1978年には収集事業実施のための米国国立公文書館側との調整のために再び出張した。

きっかけ

当時、参考書誌部があってその中に法律政治課というのがありました。「法律政治課・憲政資料室」といいましたが、法律政治課は本館の2階にあるし、憲政資料室は4階にある、というふうにして同じ課が2つに分かれていたわけです。

そして法律政治課のほうは「もんじょ（文書）」を扱うということは全く

1) 現在、米国国立公文書館はNational Archives and Records Administration (NARA) となっている。

なかったわけです。ただ、ちょうどその頃、政治関係も含めて色々な戦後史に係わるレファレンスもあり、特に1970年に米国の政府文書の情報公開で、第二次世界大戦の戦中・戦後の部分が解禁されたということもあった。また1973年にシュルマンとウォードといった人たちによって、占領期に関する非常に詳細な注釈つきの文献目録ができたんです。²⁾ また、後に色々と世話になります袖井林二郎氏（法政大学名誉教授）が『マッカーサーの二千年』³⁾を書いたりもした。そうしたなかで、一番私たちの関心があったのは、『サンケイ』がナショナル・アーカイブズ（米国国立公文書館）所蔵の文書を使って大々的に連載記事⁴⁾を書いたことです。

在外研究でワシントンDCへ

そういうふうに入って占領期に対する関心が非常に強まってきました、色々な機関の人たちが、マスコミを含めて、ワシントンに行く、ナショナル・アーカイブズへ行くようになった、というようなことを聞いていたので、法律政治課でも「GHQ/SCAP資料を、まとめて集めたらどうだろうか」というムードができあがってきた。そういうときに、たまたま私が1976年に在外研究に行くということになっていたのも、そういう資料を徹底的に調べてこいということになったわけです。いずれにしても、1970年代になってから、占領期研究が非常にレベル・アップしてきたということがGHQ/SCAP資料収集のきっかけとしてはなんと言っても大きかったと思いますね。

1976年というのはアメリカ建国200年、まだワシントンに地下鉄が通る前でした。

私の出張の種別は「在外研究」でした。これは、私が行く3年か4年前に

2) *The Allied Occupation of Japan, 1945-1952: An Annotated Bibliography of Western-Language Materials*. Compiled and edited for the Joint Committee on Japanese Studies of the Social Science Research Council-American Council of Learned Societies and the Center for Japanese Studies of the University of Michigan by Robert E. Ward and Frank J. Shulman, with the assistance of Masashi Nishihara and Mary Tobin Espey. Chicago : American Library Association, 1974.

3) 袖井林二郎『マッカーサーの二千年』中央公論社, 1974.

4) 『サンケイ』戦後30年特別企画「米政府極秘文書を発掘する」1975年6月24日以降23回連載。

スタートした制度で、調査局から1人、司書部門から1人というふうに、だいたい毎年2人ずつ、ある程度長期に出張するというものでした。私の出張の目的、名目はたしか、欧米各国における図書館のレファレンス・サービスの実態調査というものでした。3、4か月のうち少なくともふた月以上はアメリカにいたんですが、アメリカにいたのは、レファレンス・サービスとか雑誌記事索引を調べるというのが名目になっていて、占領期資料を収集することが表向きの目標になっていたわけではないんです。

調査報告に反響

私が1976年に行きまして、帰国後、出張の調査報告を書き、それが『国立国会図書館月報』（以下『月報』）⁵⁾に載ったんですが、もちろん、その『月報』掲載の論文は調査報告そのままではないです。『月報』には書かなかった部分を含めた調査報告が当時の館の上層部に回覧されて、少なくとも総務部長、総務部副部長、もちろん当時の法律政治課長の泉昌一さんが非常に関心を持ちまして、総務部と参考書誌部が一体になって、って言うんでしょうか、当時の国会関係の記者クラブ（当時、国立国会図書館（以下、NDL）独自の記者クラブはなかった）に話を持ち込んだりしたんです。

私の『月報』の論文記事に対して、わりあい世論も、マスコミも含めてですけれども、反応が高かった。『月報』の記事で抜刷を作ったなんてことはそれまでおそらく無いと思うんですね。抜刷をいつ作ったのか、何部作ったのか知りませんが、だいふ配布したんだろうと思います。それほど反応があって。あの論文のなかの殺し文句、「国民がバラバラに米国国立公文書館に行き、バラバラにそこの職員を煩わして、バラバラに資料のコピーをとるのは大変だ、それをやっぱりNDLがまとめて集めるのが経済的にも時間的にも国のためになるんじゃないか、ひいてはNDLのためにもなるんじゃないか」、というようなことを書いたのが少しは効いたのかもしれない。（論文が掲載された）この『月報』が出たのは1977年の4月号ですが、その翌年の予算にすでにもう、「特殊文書関係資料整備費」（以下、特文）として、GHQ/SCAP資料をマイクロ化して集めるという予算がついたんです。

5) 熊田淳美「米国国立公文書館所蔵の日本占領関係文書について」『国立国会図書館月報』（193）1977.4, pp.2-20

会計課へ異動

この予算で、収集事業の第1年目は1978年に始まりました。ところが、事業が未だ順調な軌道に乗る前の1980年、私は会計課に異動となり、収集事業そのものから離れることになりました。いわば敵前逃亡みたいなことになりました。会計課に移ったことは、逆に今度はこの事業の予算に関わるということになるんですけれども、移った時にはすでにもう予算の骨格は出来ていました。課長補佐を含め総務サイドのほうで作ってくれていたもんですから、予算化、予算を獲るということについては直接苦勞するというはなかったんです。調査をして、それについて色々なものを書いたりしたわけですが、それは言いつばなし。そして、会計での予算化のほうも上のほうの人を含めてやってくれた後で。そういうことで、まさに敵前逃亡というのか、ずいぶん無責任なような立場にあったかなと、今回しみじみ感じています。

収集の意義 駐在員の苦勞

先程聞くと、「特殊文書関係資料整備費」という同じ名称で、当初から今まで三十何年続いているということは、これは単にGHQ/SCAP資料の収集というだけでなく、言ってみれば、狭い意味での図書館資料「Book」だけでなく、「Bookじゃない資料、いわゆる文書」も集めるようになったということ。それと、余計なことかもしれませんが、これを契機にしてNDLにおける色々な意味での海外との交流とか視察とかいうようなことにもだんだん広がっていったんだと思います。

当初のご苦勞は、初期のころにワシントンにいらした当館駐在員の方々のご苦勞は大変だったと思うんです。特に、米国国立公文書館側の人的な問題、マイクロフィルム化するわけですから、その前提になるスクリーニングとか資料の選別とか、それから撮影スタッフをどうするかとか、色々問題があったようですが。とにかくそういうものを取り切ってきていただいたごく初期のころの方たちの苦勞は並大抵じゃなかったと思います。

《質疑応答》

館外の状況

(参加者) 五百旗頭真 (いおきべまこと 神戸大学名誉教授・元防衛大学校長) 氏が書いていますが⁶⁾、それがGHQ/SCAP資料収集のきっかけとなったのでしょうか。また、熊田さんの帰国後、1977年3月に衆議院内閣委員会で、当時新人の中川秀直議員がGHQ/SCAP資料を収集すべきではないかと質問して、当時の宮坂完孝館長が答えています。⁷⁾ これはいかにも早い反応で、まだ熊田さんの論文が掲載された『月報』が出ていない時期です。この裏事情はどういうものだったのでしょうか。

(熊田) 当時、手帖をあまりつけていなかったのですが、昨日の夜に見てみると、中川秀直衆議院議員に会って話をしたということが記載されているんですね。私の手帖の1977年5月23日のところに「衆議院 中川秀直氏」とあるので、中川議員に面会しているんです。覚えはないんですけどね。

ご存じのように、NDLの活動については、色々な意味で議員のサポートがないと実現できない。この翌々年に図書議員連盟ができるわけです。これもNDLの応援団になってほしいというのが直接の設立動機です。

当時の法律政治課と研究者

東大の坂本義和先生には、アメリカから帰ってから、予算がつくこともはっきりしてから会いに行きました。あちらもすでに独自に収集しているらしいと聞いたので、了承を取りに挨拶に行ったら、大いにやっってくださいと言われました。

法律政治課長だった泉昌一さんはアメリカ政治史が専門で、アメリカ学会に所属していました。その関係で袖井林二郎さん、天川晃さん(横浜国立大学名誉教授)、別のつながりで竹前栄治さん(東京経済大学名誉教授)たちに色々お世話になりました。当時は、アメリカ学会や国際政治学会の研究者がよく法律政治課に出入りしていました。それから外交史の大御所、入江昭さん(ハーバード大学名誉教授)もみえました。泉さんを介してそうした人たちとのつながりができたし、そのつながりが情報のソースになったという

6) 五百旗頭真「原資料とのおつきあい」『神戸大学附属図書館報』8(2)1998.7, pp.1-2

7) 第80回国会 衆議院内閣委員会1977年3月15日 内閣委員会議録第7号

ことがあります。だから、五百旗頭さんからの働きかけがきっかけになった、というのは大いにあり得ることだと思います。また、どうもミュンヘンの現代史研究所がNARSで資料を集めているらしいということを聞いて、実際にはそのときまだ集めていませんでしたが、私の出張の訪問先の一つに加わったのも、そういうバック・グラウンドがあったからです。

それから、その当時の法律政治課には住谷雄幸（すみたにおさち）さんがいました。住谷さんはBC級戦犯のことを研究していました。住谷さんと私でシュルマンとウォードが編纂した占領期の文献目録の書評を書いて『月報』に掲載されました。⁸⁾ その文献目録はオリジナル文書（文書資料）についてはほとんど書いてなくて、ほとんどプリントされた資料の解説ばかりだったんですね。それで、もっとオリジナル文書について調べる必要があると書評に書いたんですね。それでいよいよ、調べに行っただけで来たことになった。

一括収集しかない

そして出張でイギリス、西ドイツ、アメリカに行くうちに、（関係文書群を）一括して集めるべきだというふうになるようになってきて、最終的には、帰国後出張報告書執筆時には、「一括して全部を集めよう」というアタマになっちゃったんですね。

ミュンヘンの現代史研究所に行ったときにも、つくづく、一括じゃないと具合悪いと思いました。これは、資料に対するものの考え方の違いに由来すると思うんですが、現代史研究所は研究機関ですから、資料を集めて占領史を書くのが目的だから選択的収集でもいいかもしれません。しかし、図書館が選択するなんていうのは、私に言わせると、とんでもない。集めるんなら、そのままと。NDLが「占領史」を書くなら選択的に集めるべきかもしれないけれど、そうじゃない。あくまでも図書館なんだから、選択ではなく、そのままを集めるべきだという考え方でした。ただ、今、逆に、利用状況、当初意図したとおりに使われているかどうか、というのが心配なんです。また研究者のあいだでも五百旗頭さんも含めて、どこかで全部集めてよ、という考え方がかなり広く浸透していたんだと思います。

8) 住谷雄幸・熊田淳美「日米二つの「日本占領文献目録」—紹介と比較」『国立国会図書館月報』(161) 1974.8, pp.16-18

館内の積極的な動き

もちろん議員だけじゃなく、当時の酒井悌（さかいやすし）総務部長、総務部副部長が高橋徳太郎、それから高橋徳太郎さんと大の仲良しで法律政治課長だった泉昌一さんが、非常に強く、アクティブに動かれたんであろうと推察しています。さきほど「私は敵前逃亡だ」と言ったのは、お膳立ては色々したかもしれないけれど、工作、根回しはそうした方たちがやったということです。

正式な出張報告を出す前に、ヒラの私が館議によばれて説明したんです。そこで、私はGHQ/SCAP資料収集を大いにやるべきだと答えたんですけど、案の定、館議メンバーの中には、「いや、それよりもっとやるべきことがある」というようなご意見もありましたけれど。それに、どれくらい予算がかかるのかと訊かれて、私は一桁間違えて言ったんです。50億円とか答えてしまった。そうしたら、「図書館には今そんなゆとりはない、もっと他に収集すべきものがある」という人もいました。

館外の動き 朝日新聞記事、大蔵省

これもはっきり覚えていないんですが、『朝日新聞』の一面に、NDLがGHQ/SCAP資料を一括して収集するって出たんですね。⁹⁾ そういう新聞記事なんかも、私どもから言わせると、「大蔵を動かした」んですね。大蔵省を動かすためには色々大切なことがありますけど、やっぱりなんと言っても世論の支持があるっていうことは非常に大きなことです。それと、非日常的な要求ですから、大蔵省はその意義を認めたんだろうというふうに思います。

そんなようなことで、かなり周辺のムードって言いましょうかね、それはかなりいいほうに向かっていたということは確かです。それと、とにかく何かやろうと思えば、人を動かさないと。黙ってではなかなか動かないということだと思いますけどね。

館外との調整

(参加者) 当時、東大の坂本義和先生のグループや大蔵省財政史室の秦郁彦

9) 「占領期の米極秘文書 入手進む」『朝日新聞』1976年11月10日朝刊1面
「続々と“戦後裏面史”」『朝日新聞』1976年11月10日朝刊3面

さんが、米国に行ってGHQ/SCAP資料の収集をすでに始めていました。NDLがこのプロジェクトを始める前にそういったところとの調整はしましたか？

(熊田) 秦さんは、そのかなり前から、1970年より前かもしれませんが、法律政治課によく出入りしていました。『昭和財政史』¹⁰⁾の編纂をしておられて、竹前栄治さんもそのお手伝いをされていたりしていました。

日本の「国立公文書館」への確認

もう一つ大事なことは、私がこんなような目的でアメリカに行く前に気になっていたのは、国立公文書館なんですね。要するに、なんで図書館がアメリカの公文書館に調査に行くのか、そして、なんでゆくゆくは収集するのか。ライブラリーがなんでアーカイブズ分野に踏み込むのか、ということが私は一番気になってたんですね。それは許されるに越したことはないので、公文書館にも行って、色々話をしました。直接会ったのが国立公文書館のどなただったのか、よくわからないんですけども。とにかく、国立公文書館は日本の公文書については関心があります、けど外国の公文書には関心ありません、ということでした。極端に言うとな、それが日本に関係しようが何だろうが外国の公文書には関心ありませんと。あ、それだったらウチしかない。こういうことが、強い、また一つのエンジンになったことは間違いない。そのへん、公文書館との境界が曖昧のままだったら、あんなふうにはアメリカの公文書館に強く言うことはできなかった。

千代 正明 (ちよ まさあき)

GHQ/SCAP資料収集にあたる現地駐在職員として1981年から1984年にかけてワシントンDCに滞在した。

星健一さんからの引き継ぎ

私自身は二代目ワシントン駐在員として行きましたけれども、初代の星健一さんが、お亡くなりになってこの場にはいないというのが本当にすごく残念

10) 大蔵省大臣官房調査部財政史室編『昭和財政史』大蔵省大臣官房調査部財政史室, 1951-1965

ですね。先程から話に出ている1978年から1980年という一番初期の最も困難な時代、その時代を本当にご苦労されながらやってきた、その人の証言がないというのがすごく残念に思います。私自身は1981年から行きましたので、星さんが最初に行かれた時から比べたら、もう3年経っていたので、ほぼルーティンの仕事として占領期の資料を収集できる態勢になっていました。

私が行った1981年4月からワシントン・オフィスが開設されまして、「Head of the Washington Office」を名乗れと言われたんですが、恥ずかしくて名乗れなかったのを覚えていますね。ただ、私が会計上の役割を引き継いだのは、1981年の5月1日からだったので、その1か月間は、星さんがワシントン・オフィスの初代の所長さんとして存在したということが明確に記録として残るようになり、よかったですと思います。

私が行ったのは3月の半ばぐらいだったと思うんですけども、星さんが5月の半ば頃からヨーロッパ経由で帰国されましたから、1か月ちょっとですね、星さんと一緒に引き継ぎの作業を行いました。その頃は、東京のNDLにはアメリカでやっている仕事のノウハウを持っている人は一人もいなかったわけですね。ですから、私はアメリカへ行って初めて星さんとのやりとりの中で、仕事の手順を一から教わりました。やっぱり、年度末に行って年度初めを経験するという、これはまあ、会計上一番重要な時期ですから、締めのやり方とか、新しい雇用契約とかですね。そういうものを星さんと一緒にやれたということで、そこで大体、私のワシントンでの3年間というのが安定して行えるというようなかたちになったと思います。

「ワシントンの3年」 日々の業務

(具体的な)作業は、私は、「ワシントンの3年」という記事を『びぶろす』¹¹⁾に書きましたので、ほとんどその中で記述しております。すでに帰国後30年を経過し、NDL退職後自分の資料を大幅に処分しましたので、手許にあるのは「ワシントンの3年」という記事と、毎日つけていた日記だけです。それを見ると、誰と会ったとか何をしたかというのはわかります。その二つだけが、今回みなさんにお話しするのに頼りにした資料です。

ナショナル・アーカイブズのストランド、そこでGHQ資料を収集していたんですけども、当時は、マイケル・ギャフニーという人が資料のチェックをするわけです。これは見せていい資料か悪い資料か、スクリーニ

11) 千代正明「ワシントンの3年」『びぶろす』36(3)1985.3, pp.14-21

ングですね。それから、ベティ・ゴードンという人がテクニシャンとして資料を運んでくれたり、我々の事務的な用をやってくれる。こういう方たちもすごく慣れてきているということもあったので、ほとんど問題らしい問題は起きなかったというように思います。そういう意味では、二代目としては、初代の星さんのご苦勞のおかげでラクをさせてもらいました。

我々の作業としては、毎日閲覧室に行って、出てきている箱を開けて、そこでディスクリプション・カードに記述をして分類をして、それからフィルムに撮る・撮らないの指示をして、ということを繰り返していました。スタッフは、私が引き継いだときは6人いました。全員日本人ですけれども、むこうの人と結婚されたり、むこうで勉強したりしている人たちでした。この6人をどのように雇用するかというのはなかなか難しい問題で、結局、予算とその時にやれる仕事量で決まりました。

星さんの時はNARSが出納する資料は1日5箱という制限があって、その制限のなかで仕事をやりました。私の時になって1日7箱で月に110箱だったかな、月に110箱はOKですと。年に1,000箱を越えても3月までは110箱毎月出しますというようなことで。相手側がかなりスクリーニングに自信をもって来たんだと思いますけれど、スピード・アップされてきたので、あんまり心配することはなかったです。ただ、6人を雇用するととなると、1日だいたい3人ちょっとで十分なんですね、仕事量としては。そこで、全員パート・タイマーになってもらって、ある曜日は来ていただく、ある曜日は来ていただかないというようなかたちで作業をしました。そして、枝松さんに代わるときに結局、3人まで職員を絞りました。ですから、あの方たちには途中で辞めていただいたり……。色々そういう意味では、心苦しい立場に立ったこともあります。

ボックスを開けてみたら…

日本人スタッフのほうですけれども、仕事は出てきた6箱なり7箱なりをやるわけですけれども、開けてみないと何が入っているかわからない。これが、まあ一番の楽しみでもあり、ドキドキするところでもあるんですね。というのは、おもしろい資料があれば読みふけて時間が経つのも忘れるということもあるんですけれども、例えば全部が『Official Gazette (英文官報)』であるとかね、そういうこともあるわけです。そうすると、朝行って5分で終わっちゃうんですね。これは本当に出たところ勝負の世界だったので。ただ、責任者としてはですね、NARSの本館に行ったり、それから米国議会図

書館に行ったり、色々な仕事があったのでそんなに簡単に終わることはなかったんですけれども。ただ、スタッフのみなさんと食事をゆっくりしたり、植物園に行ったり、そういう楽しみを味わった覚えがあります。そういった意味では楽しい日々だったと思います。

特文予算の執行

それから特文の予算の使用についてですけれども、我々の時代には1年に240万コマを撮るということで固定していましたので、それに作製単価をかけると、使うお金は決まるわけです。私の駐在期間中の最初の頃が、1コマが6.5セントだったんですね。その240万コマ分を文書のお金としてNARSに払う。NARSはそのお金の中で先程お話ししたスクリーニングをする人、テクニシャン及びカメラマン3、4人を雇うというかたちでした。彼らにとってみれば、日本のプロジェクトがなくなるとお払い箱になってしまうというような関係で、我々に雇われているアメリカ人職員というような立場の人たちでした。

《質疑応答》

GHQ/SCAP分類目録作成の経緯

(参加者) 文書資料を収集整理するにあたって、GHQ/SCAPの分類目録¹²⁾はどのように作成されたのか、ご存じのことをお話してください。

(千代) 私はそれにほとんど関わっていないんですよ。あの分類目録は本当にラフで。あの分類目録はその後改訂されてるんですか？

本当にラフだったので、同じ分類番号に資料が集まるということにならざるを得ない。「ワシントンの3年」に、将来、利用者のことを考えたら、より細分化された分類を付けざるを得ないだろうということを書きましたけれども、量がものすごいものですから、多分、それをやるのはなかなか難しいかなあと思いました。あの分類表をどうやって作ったかは、熊田さんのほうが詳しいので。

(熊田) 粗いと言えばものすごく粗いです。1978年の5月か6月に星さんと先方との会議に一緒に行ったときに、原案を東京から持って行ったのだろう

12) この分類表はNDL-OPAC「日本占領関係資料検索」のページに掲載されている。

と思います。その第一議題が「どういうクラシフィケーション（分類）を使うか」でした。

その原案は私どもが出して、それをむこう側が検討して、そしてさらにまた私どもと一緒に検討して。両方と併せて作った分類表で、決してNDLだけが勝手に作った分類表ではない。その前提として、アメリカは確か陸軍省がすごく細かい分類表を持っているんですね。けっこうGHQ文書の中に、確かにそういう分類をした番号がついているものがある。もう、小数点以下何桁もあって。私は図書館のそういうのってあんまり好きじゃないので、なるべく簡単にと。

分類表はやっぱり問題。私は分類主義じゃないものですから。分類というのはある意味では、思想を反映してるんですね。重要度によってもの上下関係があったり、何をどこに分類するかっていうのは人による主観の部分があるものすごくあって。そもそも陸軍省の分類表はたくさん番号がついてるんですが、これが何を意味するのか、分類表そのものがないとわからない。そういう意味で、いかに分類というものはムダというか困ったもんだと。

ですからまずは、分類は、基本的におおまかなもので当たらずと言えども遠からずというところでもいいんじゃないかという考え方がここに反映してしまっているのかもしれない。ですから粗い。もっと細かいところはむしろディスクリプションをすべきだというのが私の考え方なんです。分類という規範化されたものじゃなくて言葉で書いたほうがいいんじゃないか。例の件名目録というのはそういう考え方なんです。件名目録に近いような考え方でしょうかね。数字の羅列よりも、言葉で探せるようにしたほうがいいんじゃないか、というのがありまして。分類はなるべく大雑把にしておいたうえで、その中は、これはGHQ/SCAP資料全体を通じて言えると思うんですけども、利用者が探してよ、と。ズルいといえばズルいですけども、そんな考え方で分類表は作りました。NARS側もこれで一応よろしいということでした。その後改訂されたのを使ってらしたのだらうと思います。

(千代) 派遣された人間も占領期の専門家ではないので、もし相当詳しい分類がそこにあったとしても、それは作業の妨げにしかならない可能性があったと思うんですね。むこうで雇った職員が分類を付けて、それを責任者として私がチェックをするというかたちになる。お互いが言ってみれば素人なんです。ですから全部集めて大枠で括るという、今、熊田さんが言われたようなところが落ち着き先としてはよかったのかなというふうに思います。た

だ、それを今後利用するに当たっては、やはりそれなりの方法を講じないと不便だろうなと考えてました。利用者自身が探してよというのが原則ですけども、それでは済まないかもしれないと思っていました。

研究者との交流の思い出

(参加者) ワシントンでの収集の際に記憶に残る資料はありますか？ アメリカでの日本の研究者との交流はどうでしたか？

(千代) 研究者との交流はよくありました。スートランドには、本当に日本人研究者がいない日はないぐらい、次から次に日本から来ていました。その度に訊かれますので、その人たちの研究に対するそれなりのアドバイスをしました。我々がやっているプロジェクトで日本でもそのとき既に見られる資料、例えばGS (Government Section, 民政局) などは、そのときもう見られたと思うんですけど、そのようなものを撮りに来ている人がいるので、日本での宣伝もまだ足りないなと感じたことがあります。これはむこうにいた人でないと感じられませんが、本当に日本の占領期の研究者は、ほとんどと言っているほど、顔見知りになっています。先程から名前の出ている人たちを含めて。

私が一番記憶に残っているのは、作家の澤地久枝さん。ワシントンのNARSの本館に行ったときに、あの方はいつも着物を着ておられるんですけども、着物を着た方がカードを繰っていらしたんですよね。「あれ、あの日本人じゃないかな？」と思って声をかけました。私は澤地さんを全然存じ上げなくて、その当時からもう色々なものを書いていらして有名ではあったんですけども。声をかけたら、名乗っていただいて。それで私もこういう者だという話をして、そこはそれで終わったんですけど、そのあと彼女が日本に帰られてミッドウェー海戦に関する本¹³⁾を書かれました。そのときにアメリカの船が沈没して日本の捕虜になった人たちについて、今調べてるんだということで、その捕虜についての資料を探すお手伝いをしたことがあります。

占領関係の本に、献辞、外国の本にもアクリリッジメントというものがありますけれども、かなり私の名前を書いていただいています。それなりのお手伝いを細々としていました。あれは本当に貴重な経験でしたね。まだ日本

13) 澤地久枝『滄海よ眠れ ミッドウェー海戦の生と死』1-6, 毎日新聞社, 1984-1985.

国内に占領期の資料がそれほどなかった時代ということもあるかもしれないですね。皆さんむこうへ行かれていた。

注目資料 記者発表の舞台裏

(参加者) 収集が始まって以降、目立った資料について記者発表することがありましたが、それはワシントンの駐在員側と、東京本館の現代政治史資料室（収集した占領期資料を公開する専門室として1979年4月に開室）の星さんとの間で資料の選定について何かしら関係していたのか、あるいはNDLに到着した資料の中から独自にピック・アップしていたのか、そこら辺の事情をお話してください。

(千代) 星さんから聞いたところでは、星さんの駐在員時代は、やはり大変だったようです。星さんの方に「どんなものがあるんだ、出せるものはあるか？」という要求がNDLから来たみたいですね。ですから、それこそ終戦記念日とか、そういったときには星さんは大わらわで、これは使えるんじゃないかという資料を送っていたとのことでした。ただ、私のときは、星さんが東京にいたので、星さんがだいたい按配をしてくれて、私自身に「何かないか」という緊急の依頼はありませんでした。余裕をもって東京でやれていたのではないかと思います。

(参加者) 千代さんが現地で整理をしているときに、日本のマスメディアのほうから接触してきたということはありませんか？ 千代さんのほうからリークしたようなことは？

(千代) プレスの人たちは皆そうなんですよね、基本的には「この資料が欲しい、これについての資料はないか？」と尋ねてきますから、リークもなにも、こちら側が「こういう資料がありますよ」と出せばむこう側は十分で、それで自分たちが調べたというかたちで（記事を）出すということがたくさんありました。

枝松 栄（えだまつ さかえ）

GHQ/SCAP資料収集にあたる現地駐在職員として1984年から1986年にかけてワシントンDCに滞在した。

3代目駐在員

(枝松) 私は3代目（駐在員）で、先程千代さんが引き継ぎの件のことを話されましたが、（1984年）3月6日に成田を出て直行便でダレス空港に着きました。

ほかの方の駐在期間は3年でしたが、私は2年で、早く帰してもらいました。単身で行きましたから、何から何まで一人でしなければならなかった。本来の資料収集業務のほかに、人事とか会計などの仕事や日本からの訪問者の接遇もありました。

着いた年はちょうどNARSが創立50周年を迎えるという記念すべき年だったので、6月には本館で記念式典が行われ、その当時、NARSの館長さんはR.ウォーナーさんという、歴史学者で非常に有名な方ですが、彼の名演説を聞いたのを覚えています。¹⁴⁾

担当アーキビストのこと スタッフのこと

先程もでしたが、オフィスを運営する上で、アーキビストとスタッフの件は、何かと苦勞した記憶があります。

千代さんのときのアーキビストはもう辞めていて、当初は誰もいませんでした。5月に新しいブライアン・スベリンゲンというポーランド系のアーキビストが来て、彼は研究者タイプの有能なアーキビストでしたが、8月には辞めました。プロモーションを求めてどこかに移ったんですね。多分、公文書館内ではなかったと思いますが。彼が3か月いる間に、公文書館以外の軍関係の資料についても色々教示してくれました。10月まで空席だったんです。担当のアーキビストがいないというのは、色々な点で心細いというか困ることがたくさんありました。私がつき合った二人目のアーキビストは、ダイアン・ディミコフという女性でした。彼女もすごくアグレッシブで色々教えてくれたり、相談に乗ってくれました。

14) 枝松栄「GHQ/SCAP文書の収集－ワシントン駐在員レポート－」『国立国会図書館月報』（293）1985.8, pp.16-18

それともう一つ困るのがスタッフの問題でした。ある時期から資料が増えたのでスタッフを新たに補充する必要がありましたが、その人選では苦勞することもありました。

また、それまで経験したことがない会計処理業務では、毎月の東京の会計課への報告など慣れるまで大変でした。

『ワシントン・ポスト』の取材を受ける

赴任した最初の年に、GHQ/SCAPのプロジェクトが7年目ぐらいを迎えているわけでしたからかなり関心を持たれていたのかもわかりませんが、『ワシントン・ポスト』の記者が取材に来ました。取材に来たのが7月、8月12日に「日本人が占領の“カーテン”を開けて回顧する」というタイトルでかなり大きな記事になりました。¹⁵⁾アトキンスという記者でしたが、「彼らはGHQ/SCAP文書の山に小さいけれども凹みをつけている」、スートランドの研究室の端っこで、nestという言葉を使って、「巣ごもりして毎日やっている」というような内容でした。

アメリカ人との仕事

担当のアーキビストがスクリーニングした文書類を当館のスタッフがディスクリプション・カードを作成し、その後、スートランドのスタッフがマイクロフィルム化するのですが、色々問題がありました。マイクロ化作業の部屋に行くとジャズがガンガンかかっていたり、賑やかな話し声が聞こえていました。GHQ/SCAP資料の中には英文と日本語の資料が混在しており、撮影されたフィルムをチェックすると、曲がったり、裏表を逆に撮るなんていうのは多々ありました。でも、陽気な、アフリカ系のアメリカ人が多く、彼らと仲良くなることができたのはよい思い出になりました。

ESS、G1、G2… GHQ資料のあれこれ

1年目は、経済科学局（Economic and Scientific Section ESS）の資料を収集しましたが、ESSは膨大な資料群、GHQ/SCAPの図書館みたいなところと言ってもよいかもしれません。ちょうど作業を始めた頃から財閥の資料が出て来ました。ESSの収集作業は全体で3年かかったみたいですね、千代さんの時から初めて私の2年目の2月に終わりました。むこうの担当官も

15) Japanese Look Behind 'Curtain' of Occupation by Norman D. Atkins, *The Washington Post*, August 12, 1984

「こんなに長くかかるとは思わなかった」ということで、担当官と一緒にお祝いをした思い出があります。

それから一番興味をもっていた参謀部が始まって、G1（参謀第一部）からG2（参謀第二部）、G3（参謀第三部）、G4（参謀第四部）と進んで行きました。ところが期待していたG2には、「下山事件」とか「帝銀事件」等の機密文書みたいなものもいくつかありましたが、予想した以上に少なかった。

『読売新聞』がこの当時、「帝銀事件のGHQ機密文書発見」と大きくスクープしたらしいですね¹⁶⁾。私がオフィスにいるときに東京から電話がかかってきて、「どういう資料なのか」と調査依頼が来たことがあります。このときはまだNDLはこの資料を撮影していなかったと思います。これはあとでわかったことですが、米国のフリーのジャーナリストから取材したもので、NDLがディスクリプションする前に、多分見つけていたのだらうと思います。『読売』の担当者に尋ねて、ウィリアム・トリプレットという名前があがり、彼はその後「竹の花が咲く時」という本“*Flowering of the bamboo*”¹⁷⁾を書いています。それからもう一つG2で言えば、「下山事件」ですね。これも本当はもっと資料があっただけなのに多くはありませんでした。あまり重要でないものだけが残っているのかどうか知りませんが、そういうフォルダーでした。

G4まで終わって、その次に民間諜報局（Civil Intelligence Section CIS）の資料を始めました。これは、マッカーサー宛の手紙など色々なものがあって、中味的には非常におもしろい資料が詰まっていた。それからTop Secret（TS）というファイルが少しでてきました。「トップ・シークレット」っていうから何が出て来るのかと期待しましたが、大した「トップ・シークレット」ではなかったと思います。そのあとは法務局（Legal Section LS）で、これは戦犯の資料ですから、これも中味的には興味深い資料と思いました。

帰国後も占領期資料と関わる

日本に帰って、国際協力課を経て政治史料課長に就任（1991年1月）しました。ちょうど山田邦夫さんが駐在員だったときでしたけれど、メリーラン

16) 「帝銀事件 米でGHQ機密文書発見 731部隊も捜査対象 毒物使用、教練通り」『読売新聞』1985年3月8日朝刊1面

17) 邦題：『帝銀事件の真実 平沢は真犯人か?』西岡公訳 講談社 1987.

ド大学図書館所蔵のプランゲ文庫の収集や沖縄関係の文書（NARA所蔵 琉球列島米国民政府（USCAR）文書）収集の準備作業に係りました。プランゲ文庫のプロジェクトは、専門資料部長に移ってから、メリーランド大学図書館の村上寿世（むらかみひさよ）さんという直接の担当者と、彼女のほうは真夜中の時間帯に長い間電話で意見を交わした覚えがあります。非常に熱心な方でしたが、残念ながら亡くなりました。先程から「人のつながり」という言葉がよく出てきますけれども、「人のつながり」というのは、特にこういう違う環境のなかでは非常に重要だと実感した次第です。

《質疑応答》

東京は遠かった 電子メールのない時代

（参加者） 当時、ワシントンと東京との連絡方法はどのようにしていましたか？

（枝松） FAXか電話です。それしかありませんでした。時差がちょうど14時間ですからね、時間的に大変なんです。ちょうど私が行った年、1984年の9月に父が亡くなりました。前もって帰るわけにはいかないし。亡くなったということを知ってから、飛行機のチケットを予約して、（ワシントンから）ニューヨーク経由、成田経由、伊丹経由で広島空港へと帰りました。いったん帰国してしまうと、公用パスポートが切れてしまうので、もう一回公用パスポートを取る必要があります、その間2週間くらい日本にいました。

その当時はまだ法律政治課の時代で、課には星さんがいました。彼は自分が初代駐在員で苦勞しているから、駐在員として行った人に対して精神的にも物質的にも色々なサポートをしてくれたと思います。

（参加者） ワシントンとの電話連絡の件ですが、東京は午前中に、当時の参考書誌部の庶務のところの外線直通の電話から電話するんです。そこに関係者が集まって、順番に受話器を回して、話したんですね。メールのない時代ですし。

（枝松） FAXは相互性がないからダメですね。やっぱり電話じゃないと。

（参加者） FAXがそもそもNDLに入ったのは新館が出来る直前ぐらいですからね、1985年ぐらい。業務用に使われてない頃ですね。その前はテレックスで。

(参加者) ワシントン・オフィスにはあったのですか？

(枝松) ありました。

(千代) 私の時代はなかった。東京から電話が来るのは朝なんですよ。朝の仕度でバタバタしているときに東京から電話がかかってきて、次々に(笑)。それぐらい電話が貴重だったんですね。あとは郵便ですから。郵便は1週間かかるんですよ、あの当時。郵便でやりとりすると、2週間経たないと相手の意向が自分のところに返ってこない。今から比べると本当に夢のようなんびりした時代で。今はもうメールですから、駐在している人の苦労は大変なんじゃないかなと思います。

それから職員が出張でワシントン・オフィスに訪ねてくる。大体みんなヨーロッパから周り始めて、ワシントンに来たときはクタクタで、日本食が食べたい、日本語を読みたいという状態なんです。そのころまだ職員が外国に行くのは在外研究ぐらいしかなくて、それも年に2人くらいしかいなかった時代ですから。皆さん苦勞して。だから温かく迎えるというのがわれわれ家族の役割でした。

利用者にかかせる

(参加者) 今までのなかで話に出てこなかったことですが、このプロジェクトの中で、資料の公開基準の問題がずっと当初からありまして。

泉課長のあとが藤田初太郎課長で、この方が7年くらい法律政治課長をやられたんじゃないですか？非常に長期政権だったですね。占領期資料の責任者としてずいぶん長くやられて。藤田さんももう亡くなられたわけですけど。

私は、熊田さんが1977年4月号の『月報』に書かれたときに、(派遣されていた)コロンビア大学図書館から戻って『月報』の編集係になって一番最初の4月号の校正を私が担当したんです。そのなかで熊田さんが、熊田節でGHQ資料の報告の最後に、「ほんの序の口」というNARSの碑文を引かれています。¹⁸⁾

『月報』の編集は3年間担当しましたが、その当時、藤田課長と熊田さんは、公開の時にプライバシーとかそういったことの責任をどういうふうにご利用者のルールの中に入れるのかというところで、日本の公文書館の例などを

18) NARA 本館の玄関脇の大理石像の台座の銘文 “What is past is prologue”。

色々調べられておいでで、私も法律政治課の部屋に呼ばれて見解を聞かれました。結果的に、先程の検索についての話の中の「利用者が探して」と同様、「利用者が責任をもつ」という原則になったというのは、藤田さんと熊田さんの英断だったと思いますし。実際、皆さんにその後の状態をお訊きしたいのですが、その原則は非常に開明的な原則で、この原則があることによってかなりGHQ資料の利用について、NDLに対する信頼が深まっているのではないかと思うんですけど、実際の実務上、それがその後、今までで問題になったケースがあるのかないのが気になっています。そういう問題がないうちに今まで推移しているとすれば、あのときの判断はすばらしい英断だったということになります。一方で我が国の国立公文書館の古い資料に黒塗りされているものを見ると、なおさら、そう思えます。あれは、自分たちが決めなければならないという決意でやられたのですよね？

(熊田) それもありますが、アメリカ側の基準があったと思います。彼らがスクリーニングするというのは、そもそも無条件に公開するっていうならスクリーニングなんていらないうわい。結局スクリーニングといっても、実際中身をみてやっているわけじゃないと思うんですけどね。それがネックになって作業が進まないことも、おそらく千代さんや枝松さんの時代にあったと思います。それだけ人手をかけなきゃならない。何が公開の基準かということには言わない、訊いても言わない。むこうはむこうの基準だからっていうことです。日本語の場合は中身がよくわからないし。

我々が当初気にしたのは、個人名がけっこう出てくる、それに日本語の文書がけっこう中に含まれているし、個人の手紙もけっこうあるわけですよ。だからそれをこちら側でコントロールするっていうのはもちろんできないし。使うほうでセルフコントロールしてほしいと、それより仕方ない。文書の使用の場合は個人で責任をとってほしいと、『びぶろす』¹⁹⁾に書きましたが、「4. 日本占領関係資料の利用 収集中の占領関係資料は、その資料の性質上、研究・調査を目的とする方にのみ利用に供している。そのため、閲覧には現代政治史資料室に備えてある所定の「閲覧許可申請書」を提出していただく。また、その利用の成果の発表にあたっては、関係者の名誉・プ

19) 熊田淳美「国立国会図書館の日本占領関係資料収集計画 - 第1年目の成果と利用方法-」『びぶろす』30(6)1979.6, pp.14-18

ライバシーその他人権の保護に十分な配慮をお願いしている」。ほかにも何か書いた覚えがあります²⁰⁾。今言われたような考え方ですね。

当初予定のとおり？

(参加者) 別の質問ですが、「GHQ文書総ページ≒3,000万ページ」というのは初めからの数字で刷り込まれているんですけど。全体でマイクロフィッシュ32万枚ということは、だいたい3,000万ページだったわけですよね？

(熊田) 実はそれを今日質問しようと思って来たんですよ。あれが合ってたのか、合ってなかったのか。

(参加者) 3,000万ページと概算したのはどういう根拠ですか？

(熊田) それはカッコよく言えば、サンプリング調査の結果ですね。資料は段ボールの箱に入ってる、で、さらにその中にフォルダがあって、そのフォルダの中に文書がはさまっている。そしてそれがどのくらい詰まってるか。表も裏もあれば、ページは倍になってくるし。だいたい目測と物差しで。箱の詰まり具合もあるし。そんなようなことを色々勘案しての数字でした。「[フィッシュ枚数とコマ数からだいたい3,000万ページで合っていた。]と会場からの発言あり)

結局GHQ/SCAP文書だけでいくらかかったのでしょうか？(関係者が口々に発言する、GHQ/SCAP文書以外の資料の収集も同時に行なっていたので、単独での支出金額はわからないということに落ち着く)

(枝松) 1コマあたりの作製費が最初は3セントで、6セントになって、私の終わりくらいには10セント。

(熊田) 最初の頃のむこうとのやり取りの中で、単価の中にむこうのスクリーニングをするための要員の費用を含めていいのかとか、 SHIPPINGの経費をむこうがもつのかこちらがもつのかとかが問題になって。『月報』の論文のもとになった出張報告書の中に書いてあるのですが。それを見ると先方

20) 熊田淳美「GHQ/SCAP文書収集の周辺」『続・現代史資料月報 第三回配本 (4) 陸軍(畑俊六日誌)付録』1983.3.

とのやりとり、少なくとも私の報告書の元になるものにはそんなことが書いてあるはずですよ。

(熊田) 当時のことに限らず、そういうのをもう一度レビューしてみると、色々(事業の総括の)材料になるのではないかと思うんですよ。

マイクロ化

(参加者) (マイクロフィルム撮影に) 16mmを採用したというのは当時の国際仕様でなかったと思うのですが、それを推奨して、NARSが受け入れたのはいつですか？

(枝松) それは最初のNARSとの調整のときでしょう？

(熊田) 仕様はNARSの仕様だと思います。ただフィッシュ化するのに、担当した業者の要望は色々入ったと思います。要望をトランスレートして先方に伝えた。それは何となく覚えてる。

(枝松) むこうは通常35mmだから、16mmではやらないですね。

(熊田) マイクロフィッシュ化ということは、シート1枚当たりのコマ数が35mmより多いから、業者の技術的な要望があったかもしれません。

収集事業の拡がり

(参加者) 千代さんの時代と枝松さんの時代で、次のプロジェクトの準備というのは行われたのでしょうか？例えばプランゲ文庫などはどんなかんじだったのでしょうか？

(千代) 私の頃はまだプランゲの話はなかったですね。プランゲを見に行くっていうのはしょっちゅうありましたけど。例えば駐在期間中にNDL館長の交代があり、お二人ともワシントンにみえたんです。メリーランド大学にお連れして、プランゲの日本語資料を見学したところ、「将来、撮りたいね。」とおっしゃっていました。あそこには奥泉栄三郎さんと先程名前のでた村上寿世さんがいらしたので、「撮っていただけないだろうか。」という要望は強かったですね。ただ、そこまでは私の時代はいきませんでした。

(枝松) 任期の終わりに近い頃、NARSが新館をメリーランド州カレッジパークに建設することが予定されていたので、その間、GHQ資料収集のプロジェクトを中断せざるをえず、代わりの収集資料候補として、米国海兵隊、大統領図書館やプランゲ文庫の話がありました。今回保管しているファイルを見返していたら、私が帰る年にマッカーサー記念館から手紙を受けて、記念館の資料をぜひ撮ってくれと。後任の小川元さんに伝えますという返事を出して帰国しました。

(参加者) あれは購入したんです。後にマッカーサー記念館に行ってみたら、既に1,000リールぐらいマイクロフィルム化されていて驚きました。それで、これはもう買うしかないということになりました。

(千代) 私の頃は、「年に300万ページを10年」というのが謳い文句で。それだけ言っただけで、むこうは「おお！」となって。それほど膨大な数字ですから。だからGHQのあとにどうするかなんていうのは、その時点では全然出ていませんでした。

(参加者) それが30数年続いてね。